

今年度の活動

作品発表は、2016年に川崎弘二によるディレクションで、作曲家の檜垣智也、映画監督の七里圭、卒業生の山本一彰と制作した『入院患者たち』の映画版が、フランスと東京で再映された。

2013年に作曲家の松平頼暁が、ソプラノとエレクトリック・ギターのために作曲した「時の声」の再演と録音があった。2020年に制作予定の松平の作品集に、初演時の演奏家たちにより、収録される。

科研費「マス・メディア空間における芸術表現と情報流通の研究」

(JSPS:17K02368、代表)のまとめを意識して応募した、国際日本文化研究センター共同研究「マス・メディアの中の芸術家像」が採択され、2019年度はこの研究会を中心に、研究活動をした。

本研究会の成果としては、20世紀後半の芸術を、マス・メディア(放送文化、出版文化)を前提として再配置し、1968年以降の思想動向である、ポスト・モダニズムの日本における展開を再解釈した点にある。従来研究では、フランスを中心とした思想の受容を基軸に論じることが多かったが、本研究では、マス・メディアを基盤にオルタナティブ・メディアとの対応関係を検証しつつ、芸術表現の分野からこれを照射した。

第1回の研究会で実施した坂本龍一インタビューは、1984、85年に着目し、芸術表現の分野で、作家自身が、パフォーマンスという言葉を意識し、音楽、出版、ビデオ、自主レーベル、メディア・イベントをもって芸術表現の「脱構築」を意識し、実践したことを取材し、貴重な資料となった。

また第2、3回の研究会を契機に、編集協力をした『現代思想』「総特集＝磯崎新」(2020年3月臨時増刊号)では、岡田暁生「グリッド空間とパイロイトとルイジ・ノーノの墓と——磯崎新のコンサートホール論」、川崎弘二「磯崎新と日本の現代音楽——作曲家—柳慧を中心に」、伊村靖子「「色彩と空間」展から大阪万博まで——六〇年代美術と建築の接地面」を収録した。

松井の論考は、1968年を契機に、磯崎が「ヴィジヨナリー」という立場を、方法的に選択することで、後にアンビルドと呼ばれる領域横断的な議論の機会を、その制作手法に取り込んでいくプロセスを得て、実現を問わない計画を、総合誌や専門誌に発表し、様々な議論を起こすことで、芸術における想像力を建築に取り込んだことを指摘した。

この他に、松井は榎木野衣のインタビュー「幻視者としての建築者——3・11以後の列島の〈水位〉」、篠山紀信のインタビュー「磯崎さんは事件を起こしたかったのかもしれないね、僕に写真撮らせて(笑)」を行い、1980年代から90年代前半にかけての芸術状況を現在の観点からとりまとめた。

また編集協力として、1985年の磯崎新と浅田彰の最初の対談「アイロニーの終焉

」を再録し、この議論を再読することから、ポスト・モダニズムの再論を目論み、同年の、浅田のテキストを再録するなどした。同書は広く話題を呼び、磯崎新を現在から再論すると共に、日本におけるポスト・モダニズムを再検証することができた。

第4、5回の研究会が、『現代詩手帖』2020年5月号に「湾岸戦争詩論争とは何だったのか」が小特集として収録された。

学内の活動は、授業等研究指導の他、研究委員会(委員長)として、プロジェクト全体の統括などにあたった。

他方で、日文研の共同研究は、メディア・アート・センターWGの活動の一環として、慶應義塾大学アート・センター、京都市立芸大芸術資源研究センター、京都大学人文科学研究所などとの大学間連携をはかり、横断的な現代芸術、現代思想の研究プラットフォームとしての役割を果たした。



作品

【再映】『入院患者たち』七里圭(監督・撮影)／檜垣智也(音楽)／松井茂、山本一彰(詩)、「フチュラ・フェスティバル2019」エスパス・スパーラン(クレ、フランス)、2019年8月23日。

【再演】「時の声」松平頼暁(作曲)／松井茂(詩)／太田真紀(ソプラノ)／山田岳(エレクトリック・ギター)「松平頼暁 88歳の肖像 ～声楽作品を中心に～」東京オペラシティリサイタルホール、2019年10月30日。

【再映】『入院患者たち』七里圭・最新短編＋長編6作 日替わり特集』UPLINK 吉祥寺、2019年12月14日。

テキスト

【寄稿】「みなさん何を聞きたくてここにいらっしやっただしょうね？」『MAM リサーチ 006:クロニクル京都 1990s——ダイヤモンド・アー・フォーエバー、アートスケープ、そして私は誰かと踊る』81～84頁、2019年5月。

【寄稿】「榎木野衣の時代:30年間の批判理論——「悪い場所」に幽閉された自由」『美術手帖』vol.71、No.1076、121頁、2019年6月。

【書評】「音楽を聴くことは、メディアに出会うことである」(書評:岡田暁生『音楽と出会う 21世紀的つきあい方』『週刊読書人』第3299号、2019年7月26日。

【書評】「引用が本文をつくり、過去が未来をつくる」(書評:小沼純一『本を弾く 来るべき音楽のための読書ノート』『週刊読書人』第3319号、2019年12月13日。

【対談】伊村靖子＋松井茂「都市計画の模型——受容論としての《養老天命反転AR》」『22 世紀の荒川修作＋マドリン・ギンズ 天命反転する経験と身体』フィルムアート社、234～245 頁、2019 年 12 月。

【インタビュー】榎木野衣「幻視者としての建築者——3・11 以後の列島の〈水位〉」『現代思想』vol.48-3、128～139 頁、2020 年 3 月臨時増刊号。

【寄稿】「繰り返し語り、騙られる《コンピューター・エイデイド・シティ》をめぐって——一九六八年のテレビジョンと幻視者」『現代思想』vol.48-3、242～55 頁、2020 年 3 月臨時増刊号。

【インタビュー】篠山紀信「磯崎さんは事件を起こしたかったのかもしれないね、僕に写真撮らせて(笑)」『現代思想』vol.48-3、290～303 頁、2020 年 3 月臨時増刊号。

【寄稿】「《モランディの部屋》はクワクボリョウタのアトリエにある 行為遂行性の記録体」『情報科学芸術大学院大学[IAMAS]紀要』vol.11、60～63 頁、2020 年 3 月。

【インタビュー】「坂本龍一インタビュー」(川崎弘二との共同)『情報科学芸術大学院大学[IAMAS]紀要』vol.11、176～189 頁、2020 年 3 月。

編集

【監修】『美術手帖』「特集:平成の日本美術史 30 年総覧」『美術手帖』vol.71、No.1076、116～139 頁、2019 年 6 月。

【編集協力】「総特集◎磯崎新」『現代思想』vol.48-3、2020 年 3 月臨時増刊号、2020 年 2 月(406 頁)。

展覧会

【キュレーション】「磯崎新の謎」展〈いき〉篇＋〈しま〉篇、大分市美術館、2019 年 9 月 27 日～11 月 24 日。

社会的活動

【共同研究】国際日本文化研究センター共同研究「マス・メディアの中の芸術家像」(代表)。

【科研費】基盤研究 C「マス・メディア空間における芸術表現と情報流通の研究」(JSPS:17K02368、代表)。

学内の活動

総合学 C、情報社会特論 B、Archival Archotyping、移動体芸術

【編集】『情報科学芸術大学院大学[IAMAS]紀要』vol.11 2020 年 3 月(192 頁)